

第2部 シンポジウム 「古代の東国——瓦塔・民衆・塩尻——」

桐原 ではこれからシンポジウムの方へ入ります。いろいろお話をございましたように今回の瓦塔の出土で、信濃の国、特に松本平の奈良時代というものを見直さなければならない。こういうことになったわけであります。その事について御三方の先生からお話をいただいたわけですが、何分にも初めの基調報告の時間が短くございまして、いい所へきたところで時間が終りということになってしまいました。そのようなわけでまず森先生から、さらに20分位お話をいただければと思います。特に瓦塔について、それから一緒に出ました硯について、それから同じ松本平の中で瓦塔が5ヵ所から出ているわけでありますが、その中の一番優品のあります明科廃寺の瓦塔についてもお話をいただければと思います。よろしくお願ひします。



森 それでは、補足的な事を申し上げたいと思います。まず瓦塔につきまして午前中、ほんとうに概略しか申し上げなかったので、まず瓦塔の使われ方といいましょうか、そういうことをちょっと考えてみたいと思います。菖蒲沢の場合には窯跡からの出土でございますのでどういう所で使われたのかということはわかりませんが、たとえばお手元の私の資料の中、三ヶ日町出土の瓦塔の場合ですと、これは終戦後まもなくの頃に発掘調査が行われまして、1辺2メートル四方ぐらいの正方形の基壇がございまして、基壇と申しますのは、建物を建てる為の土台です。そこを中心にして散布していたようです。そういう所から発見されたということで、おそらくその基壇上に建てられていたのではないかと考えられております。この場合には1辺2メートルですから、覆屋といいましょうか、ちょっとした建物を建てるというのではなくてやはり直接、いうなれば雨ざらしで建てられていたのではないかと考えられます。それから35番の東山遺跡出土品、これは埼玉県の遺跡でございますが、この場合には小規模な掘立柱の建物がございまして、その建物を中心にして瓦塔の破片が出土したということです。この場合には覆屋、ちょっとした仏堂といいましょうか、掘っ立て柱の建物がございましてその中にこの瓦塔が納められていたようです。それと同時にこの東山遺跡の場合には、この下の図面に塔でないミニチュアの建物がございますが、これを瓦堂、あるいは瓦金堂というようにいいますがこれが一緒に出土しました。ですから小さな建物を造りまして、その中に塔と金堂を並べるという形です。それから36番の谷津遺跡出土品ですね。これは千葉県でございます。この場合には1辺5m程の掘っ立て柱の区画が出てまいりました。ですからどうも柵で囲んだ中にこの瓦塔を据えていたのではないかと考えられ

ております。そのほかにも、たとえば千葉県でもう1ヵ所柵で囲まれていた中に据えられていたのではないかと考えられる物もございますし、同じ千葉県でもう1ヵ所、基壇の上に据えたんではないかと考えられる物もございます。ですから据え方としましては、建物の中の場合と、そのままの場合があったようです。で問題はこの使われ方ですが当然仏教に関係するものですから、これが礼拝の対象になる。ただし建物その物は礼拝の対象ではなくて、この中に仏像なり、経典なりというものを入れたというように考えられます。三カ日町の資料を御覧いただきたいと思います。図面が小さいのでわかりにくいのですが、左半分の一番下を御覧いただきますと柵で囲んでありますと、そしてその柵のすきまからなにか黒々としたものがちょっと見えます。これは実は塼仏のようなものなんです。粘土板に、仏像をレリーフ状に浮き彫りしたもの、それがこの中に納められております。ですからこの三カ日瓦塔の場合にはこの塔の中に仏像にみたてたレリーフ状のものを納めまして、これを礼拝したということになります。その他のものは伴って出土した物がございませんので、おそらく仏像であれば木彫ですから腐って残りませんですね。あるいは経巻、お経を入れる事もあろうかと思います。塔は午前中申し上げましたように、御釈迦様の舍利を入れるのが本来の目的であります、御釈迦様の舍利、骨がそうたくさんあるわけがないんです。ですからその舍利に見立てた宝石を納めるということが随分あります。それが時代がたつにつ従いまして奈良時代以後、特に法舍利といいまして経典を舍利に見立てるそれを塔内に納めます。ですから瓦塔にも経典を納めてそれを法舍利としてまつった事があったかも知れません。ですからそうした考えをより強める事ができるのがこの菖蒲沢の瓦塔ではないかと思うわけです。最下層に入口があれば、経典を出し入れできると思います。舍利もあるいは仏像も出し入れできると思うのですが、この場合にはいったん組み上げたらこれはもう何かの機会でもない限りはずす事は出来ません。これも大変手間な事であります。ですからおそらくあの中に、身舍利なり、法舍利なりを納めるつもりで造ったんだろうというように考えます。あの瓦塔の場合には、回りに柵がございます。あの柵は瓦塔の建つ基壇の周間にきちんとした穴があいておりますので、当然これは柱が建つ、おそらく三カ日瓦塔と同じような形で回りに柵があったんだろうということでああいう形で復元されておるわけです。瓦塔の建つ基壇が、あれだけの高さで造られたという例もないわけです。お手元の資料に並べましたこの四つの瓦塔もそれぞれ基壇を持っております。持っておりますけれども非常に低い基壇、これが基壇だぞということを表す程度です。たとえば、東山遺跡の場合にはこれは二重になっております。二重基壇の建物というのは高い位の建物でありますと、たとえば法隆寺の五重塔、これは二重基壇です。ですからああいうような物に見立てて造られているんだろうと思うのですが、この菖蒲沢の場合にはきちんとした基壇を伴いしかも、そこに柵を設けそして中に舍利を納める。納めるべく造られたという形で造られているわけです。でこの瓦塔がどこに供給される物であったかこれがわからないということがほんとうに残念ですが、そこに陳列してあります破片を見ますと今復元されています物とまったく別個体の物がもう一個体分ありますので、少なくとも二個体分造っていたということがわかります。ですからこれが二ヵ所に持つていかれるはずの物であったのか、あるいは一ヵ所で二基並べ

るつもりであったのかその辺はよくわかりません。瓦塔が二基並んでもすこしもおかしくないわけです。この時代ですとすでに奈良の薬師寺のように東西両塔、東の塔、西の塔、二つの塔を並べる寺があります。ですから瓦塔が二つあってもかまわないと思いますが、いずれにしましても非常に細かい所まできちんと造っています。我々は軸部というように申しますが、この組み上げの所ですね、大変でいねいに造られています。こうした物は確かに年代的に考えましても、8世紀の第3四半期ということありますから、まさに特殊な製品、特殊な物というように考えることができます。こうした特殊な物を造ることができることになりますと畿内から、そうした技術者が派遣されてきた可能性を十分考える事ができるのではないかと思います。と同時に同じことがこの菖蒲沢の窯跡から出土しました硯についてもいえるのではないかと思います。もうすでにじっくり御覧になったと思いますが、鳥の形をしました焼物がございます。鳥形の硯です。鳥の形を作りまして、身体の方に陸と海を作り、鳥の頭を付け羽が蓋になっています。ああした特殊な硯は、全国的にも数が非常に少ないので、平城宮跡からもたしかに出土はしておりますが、ほんのわずかです。もっとも、平城宮というのは天災でつぶれた宮殿ではなくて政治的な理由で次に移っていきますので、いい物は全部持っていってしまう。使い古した物、こわれた物しか残っていないという面がありますけれども、それにしましても、平城宮跡を30年掘っておりましても、ほんのわずかしか出てこない。そうしたものが、この菖蒲沢から何個体分でしょうか、四個体分でございますか。それだけ出土しております。これも大変なことだと思います。あのような硯を使える人達、どういう人達が使ったのか、もしこれが信濃の国で使ったということになれば、国庁、国衙、あるいは郡衙の高級官僚が使ったんだろう。あるいはお寺の高僧、身分の高いお坊さんが使ったのかというようなことが考えられます。硯は全国的にも随分たくさん出ています。これはもう文字が普及していますから硯が当然たくさん出るわけですが、そのほとんどが我々転用硯という名前で呼んでいますが、須恵器の廃品を硯に転用したものなんです。当時硯は焼物ですから須恵器であれば甕であっても、お皿であってもそれを硯に転用することができます。そうしたものがほとんどです。おそらく8、9割転用硯だろうと思います。ですからそうした状況にあってあのようなきちんとした鳥形の硯が造られていたというこれも、オーバーにいえば驚嘆すべきことというふうに考えます。ですからなおさらあのようなものがどこで使われたのかということを知りたいと思います。

それから明科廃寺出土の瓦塔ですが、これは二種類あります。一つの方は垂木が一重ですね。その瓦塔を下からのぞいていただきますと、屋根の下に垂木があります。垂木が普通は屋根の所に軒に沿って一列出るのですが、二列並んでいるものもあります。こういうものを二軒といいます。これを飛えん垂木と地垂木といいますが二軒の建物は高い位のものであります。明科の資



料は一軒のものと二軒のものがございます。二軒で造られた破片は隅木がコーナーから出ていまして上から見ると隅木とこの屋根の軒先の角度が大きいのです。ということは屋根の形がおそらく多角形、六角形なり、八角形という特殊な形の瓦塔ではなかっただろうかという事が考えられます。明科廃寺出土の瓦は私は今まで拓本、あるいは写真でしか拝見したことがなかったんですが、なにか稚拙な感じがいたしますが実はあのような文様を持つ、軒丸瓦も全国的に非常に少のうございます。丸瓦の真中辺に文様があります。蓮弁、蓮の花びらなのですがおおむね、こういうふうに1つ1つの蓮弁は盛り上がっています。ところが明科廃寺の場合は、蓮弁が凹弁、へこんでいる。しかも凹弁で底が丸くなっているのではなくて稜がついています。これは非常に少ないですね。昨年私共の博物館で瓦を主体としました特別展覧会をいたしまして、御当地長野県からも何点か拝借したのですが、明科廃寺のものをもう少し良く知っていれば、当然拝借したんだろうと大変残念です。おそらくあれは7世紀の後半だと思うのですが、そのころの系譜といいますか文様の流れは、百濟系、あるいは高句麗のものが主流だったのですが、明科資料はおそらく三国時代の新羅の要素を非常に強く伝えているというように見受けられます。あの瓦にもそうした特殊な要素を持っている。でおもしろいことに向って左の端の方に何点かおいてあります丸瓦、平瓦の破片ですね、あそこに文様が随分見受ける事ができます。瓦を作る時には、粘土離れがいいように、叩きしめる時に離れやすいようにその叩き板、叩き道具に文様を彫ります。そしてそれが瓦面にも文様として表れるわけなんです。あの文様にはどうも高句麗の要素がうかがえる。ですからこの明科廃寺の造営時にはいろんな技術が入ってきてる感じられます。もちろんストレートに入ってきたのではないんです。この信濃の地にはいろんな技術が入ってきてるわけで、技術の流れは決して一筋ではないわけですから、いくつかのルートがあって、そういうものがミックスされて新たな文化が作られていくわけです。そういう中で高句麗系、古新羅の要素が見受けられるというのは非常におもしろい事ではないかと思います。それから御質問の中に、瓦塔はなぜ西に少なく、東に多いのかという大変むずかしい質問で私自身良くわからないのですが、ただ可能性として考えられるのは仏教がどんどん広がっていきます。しかし寺を造るというのはですね、午前中にも申し上げましたようにお金が随分かかると同時に、その技術を知っていないとできないわけです。建物を造る技術、そして仏像を造る技術、そして経典を書き写すならばその見本となる経典がなければいけない。そして仏教の知識がなければできない。要するに中央政府と直結している者たちがまずそういう技術を取り入れができるわけです。それもランクがあります。ですから仏教を信奉したい、しかしながら技术者を派遣してもらえない。そういう人達がまずこのような瓦塔を造って、鞘堂の中にそれを納めてそして拝む。瓦塔の前には机があってそこには何巻かの経巻が積んであって花を供え、仏様を祀る。そういう情景が浮かんできます。全体の流れからみますと、寺院建築というのは畿内、そして東西に波及していくますがどうしても東国が遅くなっています。ですからそうしたあらわれがやはり瓦塔に見られるのではないかとそんなふうに思います。

桐原 どうもありがとうございました。今の森先生のお話で瓦塔についての知識がより深ま

ったことと思います。あらためて申してみると、この塩尻の菖蒲沢の瓦塔は、瓦塔の中では一番大きくて、そして時期的にも古い、しかも性格の上からいえば、源初的な塔そのものの性格が強くこめられているということです。これは先生のお話を承って私達が感じた一つの大きな収穫であると思います。それからこれだけのものが窯の天井が潰れたりして駄目になったわけです。だから現在残ったわけですが、これを注文した人はそれで仕方がないとあきらめたわけじゃないだろうと、そういうことを言われております。必ずこれより良い物がその人の所へ運ばれて行ったんだろうという事になります。ということになりますと、これより良い物がこの松本平のどこかから出てこなければならぬ、そういう事になりまして今後の私達の研究の一つの目安になるというわけです。それからお話によれば、この窯が潰れたとすれば、たちまちどこか近くにもう1基造り直したであろうと言われました。となればこういうような窯はまだ松本平の中に何ヶ所かあるはずだから探してほしい、そういうような事も言われたわけです。それからまたこういうふうに何基もの瓦塔が造られていると、1つの所で2つ瓦塔を造ってもおかしくないんだと言われたわけです。

さて次にまいります。森先生の午前中のお話の中で、この時代は律令時代、千カ条の法律を運用している時代なんだと、その為にはどうしてもその勉強、漢字というものを知らなければならないということを言わされたわけあります。つまり奈良時代には文字を知っている者の層がだんだん厚くなってきたんだということを言われておられます。そういうような人々がこの松本平の村の中にも大勢いたんだということを言わされているわけであります、そういうことと関連しまして次の岩崎先生のお話へ移っていきたいと思います。なお、その前に森先生が使われた資料の中で一つ言われたことがございます。その墨書土器の中に「南殿」と書いた資料があるということを御提示になりました。「南殿」は「君子南殿」の南殿でございます。そういうところから郡司階層と関係があるのでなかろうかというお話をされたわけです。でこの「南殿」の出ました遺跡は松本平の奈良井川よりも、西の方の旧の神林村の下神から出ていたわけですが、そこからあまり距離をおかない島立村の北栗からは瓦塔が出ているわけです。そういうことで、この御提示されました資料、そしてその南殿と郡司階層というものを結ばれた。ちょっとこれは今後、地元の郷土史の研究の上に考えていかなければならぬ問題だろうというような気がします。ではこのような事をふまえまして岩崎先生この当時の村の構造といいますか、村の中における人ととの繋がり、最後のところで、こういう中から官人層が出現してくるんだというお話をされたわけですが、その辺のところをもう少しお願いします。

岩 崎 ただいまの桐原先生の御注文通りになるかどうかわかりませんけれど、まず午前中に申し残したことちよと補足させていただきます。午前中世帯の自立性を必要以上に強調した嫌いがあります。その為に誤解を生じたことがあったかと思います。私が申したかったのは世帯が最小単位となるのが一番機能的なというか、あるべき姿だったということであったわけで、決してつねに世帯が単独で行動するということではありません。それにしてもなぜ世帯が最少の単位になりましたかといいますと、私はその当時の婚姻形態に原因があったろうと考えております。

二枚めの史料に延喜式の祝詞の中の大祓（これはいろんな方が使っていますが）を42録しておきました。その中略以後の所に、人としてはいけないことが記されております。それによれば「己が母おかせる罪、己が子おかせる罪、母と子つまり妻とその娘をおかせる罪、子と母つまり妻とその母をおかせる罪」と出ています。つまり人間としてはいけない近親婚の限度が具体的に示されているのです。これは、当時近親者との結婚が常識的に行われていたことの裏返しといってよいでしょう。あってはいけない夫婦関係とは、ほんとうの親子関係などごくわずかしかなかったことがわかります。



この頃の婚姻関係を示す一例を表示しておきました。これは美濃の国の有名な大宝二年の戸籍を対象とした統計です。国造族、これはこの地域としては高い地位の族姓です。拾い出せる婚姻関係の件数は51あります。そのうち国造族同士が41件だから大部分が族内婚だったことがわかります。ところが春日姓の場合は8例中2例ですから、身分的に高いか低いかによってばらつきが大きかったようにみえます。だが、いまは族内婚が多かったと指摘しておけばよいでしょう。また、その他と書いてある石作部まで同じ村内、といっても自然を行政的にいくつかまとめたものでしょうが、の人びとです。通婚圏もまた広くはなかったのでしょう。このような婚姻関係がどんどん広がると、親戚づきあいはどうなるかが気になります。御存知の通り日本の場合には従兄という場合、父方も母方も区別なく従兄といいます。伯父、伯母という語も父方、母方区別なく使います。こういうことは中国などではありえないことで、単系、要するに男なら男の系譜で出自集団、氏族集団を作るような所では、族外婚が圧倒的ですし、まして父方と母方の親族は、はっきりと区別されます。日本のようなことはないわけです。ということはこの国では父方、母方、両方とも区別されることがなかったためではないではないかと思えるのです。群馬県にあります有名な山の上の碑に書かれている文章でも佐野三家をつくった、健守命の孫の黒壳刀自が、新川臣の子斯多々弥足尼（宿禰）の孫である大兎臣と結婚して、生んだ子が長利僧であると、僧の父方、母方両方の系譜をそれぞれ公平に記しております。父方、母方、両方を区別しないというか尊重する傾向が日本の場合強かったようです。これから判断して単に父方だけを尊重する父系的な集団は、この時期まだなくて父方、母方双方を同じように尊重する集団が一般的なありかただったようです。父方、あるいは母方の一方だけが尊重されるなら親族団、同族団がすぐにできます。ところが父方、母方双方を大事にする社会では、婚後、父方、母方どちらに居住することもありうるし、同じ兄弟でも近縁関係が異なるですから同族団として結集するのにどこで線を引いてよいか、いやどこでも線を引きうるような関係であるはずです。となってきた場合、確実に常に核となるのは夫婦と子供という関係しかありえず、兄弟でも婚後は結集軸にはなりえないに違いありません。ここから想定できる「家族」とは非常にルーズなものと思います。だ

から名吉屋大学の早川先生がいわれる「アミーバーのような社会」という表現は共感がもてます。どこで切っても「家族」として存在できるような形だと思うのです。従って私はこの段階に家父長權が十分に発達していたとは思いませんし、また財産權なども十分に確立したとは思わないのです。つまり自由に動きやすい状況があったのではないかと思います。彼らに逃亡だけではなく自分の生活をより良くする為のいくつかの手だつもあったと思います。その手だつての一つとしてあったのが、役人になることだったと思うのです。なぜならば役人になったら税の一部が免除されます。しかも月給ももらえます。いまはわかりやすく税とか月給と現代的な言い方をさせていただきます。ということでいろいろな人が役人になる事を考えます。そんなに簡単に役人として受け入れてくれたのか、という疑問も生まれるでしょう。そこでほんのわずかですが史料を出しておきました。たとえば軍防令の「張内条」、帳内とか資人というのは雑役をやる人と理解していいのですが（これを見ますと6位以下の人、ならびに庶人から帳内を取れとか、8位以上の人の子供は取ってはならないとか、三閨、太宰府についてはその土地で採れとか割合一般民衆に近いところに帳内、資人の座があったようです。）中宮だとか東宮の方でもやはり位を持っていない白丁、つまり一般の人々の中から雇われることになります。雇われて一定の考課を経ると、位をもらうことが可能になるわけです。先程の話に関係あります写経所の写経生の中には、そういういた一般民衆あがりの人が、かなりいたようです。ですから文字を知って、コネをたどって都へ行こうとの算段をする人もでてくるわけです。読み書きができる、何かができるということになると、正式な役人への道が開けていたのです。ここに有名な文章の類聚三代格の一部を拾い出しておきました。播磨の国ではこの国の百姓の過半が六衛府の舍人になってしまったということが書いてあります。とするとその地方から税の取立てが行いにくい状態になります。780年前後の頃（ちょうどこの瓦塔が造られた前後の頃だと思います）になりますと律令体制の財制的逼迫から、お役人の月給が削られはじめます。これが続くと役人になるメリットがあまりなくなります。しかし一度、位についてしまうとあちこちで雇ってもらうチャンスが得られます。むしろ役所などで安い月給をもらうよりは、お寺に雇われるなどして日銭をかせいで方がいいということにもなってきます。実際に位をもらいながら役所に出仕しない人がふえてくるのが8世紀の終りぐらいのことといいます。役所としては人手が必要ですから、欠員を採用することになります。そしてその人達がある位につくとまた出仕しなくなるという悪循環が生じます。そういうことで相当な数の有位者が生まれる状況になるわけです。もちろんコネのある所はコネをたどってそれがふえていくが、コネを欠くところでは困難というように、全国万遍なく同じような状態であったとは思えません。いま証拠は何もございません。しかし長野県の場合も交通上の要衝にあたる所などでは比較的そういうチャンスにも恵まれていた場所もあったのではないかと考えられます。そして一旦コネが出来ればそこの地域の人々は次から次に雇われる可能性を秘めていたこともあります。そういういた外との交流といいますか、特に都との交流などを含めまして、意外に高い水準の文物を身につける道も開けていたのではないかと考えています。そして都に出て行く場合、その「家族」の中のある世帯が出て行っても何も不思議はなかったでしょう。「家族」がふくらんだ

り、狭くなったり自由自在になりうる集団関係であったことが、これを機能的に行わせる下地になつたんじゃないかと想像をしているわけです。これは今申しました通り想像でして、状況証拠からそう申しているにすぎません。したがって証拠を見せろと言われたら何も示せないのが現状であります。しかしそのような雰囲気がこの時期にはあって、意外に風通しもいいし、いろんな物の流れも村人の人間関係の中で、比較的スムーズにいけたんではないかと考えたいのです。少し極端な形で話を展開しましたが、先入見を去っていろいろな視角からムラの歴史を見なおそと提案してみたかったのです。

桐 原 どうもありがとうございました。ただ今の先生のお話の中で都合のよい所だけを私取り出して次のように考えたわけです。この8世紀の後半というような時代、松本平の中に幾つかの村があった。村の中には様々な人々がいるわけでありますけれども、その人々の中には文字を知り、そして下級官人として都に出て行く。そういうような人々がかなりいたんじゃなかろうかと理解したわけです。関連しまして質問が出ておりますので申し上げて岩崎先生にもうひとつお話をいただきたいと思います。では質問を読みあげます。

松本平では、7世紀末から8世紀の前半にかけてそれ以前、未開の荒野であった土地への開発が一斉に開始されたんだと。この生活の単位が、単婚の家族であったとしてもこの7世紀末から8世紀にかけての開発を大規模に組織し、実行した主体者がもっと上位にいたように思います。この主体者にどのような層を考えればよいのでしょうか、こういった層が瓦塔の需要者なのでしょうか。

こういう質問でございます。

岩 崎 富農層といいましょうか、私先程言いましたように近親婚的また狭い婚姻圏の中で横の関係をたどって、親戚みたいな形でからみ合う血縁的、地縁的にいろんな形で結束できる集団関係が考えられます。そういう中にはもちろん集団を統率し統合するような在地首長層があり、それに率いられていたと理解していいと思います。もちろん開発などの場合（たとえば『常陸國風土記』の「箭括の氏麻多智」の話がございますが）まさに在地首長が自分の周辺の人々を引き連れて開発にあたることも多かったといえましょう。これもまた婚姻関係にかかわりがあるだらうと思います。御質問にあるとおりもちろんそれの上にのっている政治的な構造をも考える必要があります。

桐 原 どうもありがとうございました。先に岩崎先生は午前の発表の中で瓦塔というものは、今までお寺であるとか、官衙であるとか、そういう所から発見があつたけれども最近は村落遺跡、集落遺跡から発見される傾向が多くなってきたともお話をされたわけです。それから金井塚先生は信州と境を接した鬼石町では、最澄の話を9万人人の人々が聞いたんだというお話をされたわけです。時代は下りますけれど、そのような時代9万人人の人々が最澄の法華経の話を聞くために自発的に集まってきたわけです。おそらくその中には峠を越えて信濃の国からも大勢の人人がその講座につながったんではなかろうかというふうに感じるわけです。でその下地というものは8世紀の末までいかなくてその前の時代からあったんだということになり、その証が瓦塔で

あるといわれているわけです。瓦塔という物は氷山の一角だというように言われております。氷山の一角であるということになりますと、水平線下に隠れている部分ははるかに大きいわけであります。それがおそらくこの松本平にまだあるんだということを言われたわけです。これから我々はそれを発見しなければならないわけでありますが、そのための手掛りというか、足掛かりとして金井塙先生、もう少し関東の国における奈良時代の仏教の下地のようなもの、この時代にどの程度の民衆がこの仏教を信じていただろうか、もう少しお話いただければ有り難いのでござりますが。

金井塙 奈良時代に東国に仏教がどの程度浸透していたのか、そういう事は大変わかりにくいんで、まあ状況証拠から漠然と考えているにすぎないんです。まして、東国の民衆がどのくらい仏教に帰依していたのか、今日具体的にお話できる材料はまったく持っておりません。

先程の表をもう一度御覧になっていただきたいと思います。東山遺跡の瓦塔と一緒に、東国の廃寺の、現在の確認状況を示したものを出してあります。これは私共が、県立博物館で「古代東国の巣」という特別展をやりました。その時に収集した資料です。おそらく現在はこれより若干ふえていると思いますが、この表でも明らかなように国分寺建立以前の廃寺が関東では、48カ所見つかっております。この表では国分寺建立以後、8世紀後半になりますと、一時造寺活動が停滞しているように思えます。確認されているお寺の数が少ないのか、それともこれが事実で、その裏には造寺活動が停滞したという現実があったのか、その辺はなんともいえませんが、廃寺の数は少ないんですね。もしも後者であれば、あるいはこの時期には国分寺建立に大変なエネルギーを使って、在地の造寺が衰退したという証拠になるかもしれません。あるいは、在地仏教が国分寺に象徴される国家仏教の中に組みこまれていった、奈良時代の仏教の実態を具体的に示していると考えていいかもしれません。いずれにしても、確認された廃寺は、東国仏教の動向を直截に表現していると考えて間違いないでしょう。

しかし、私がここで問題にしたいのは、国分寺建立以前の48カ所の廃寺なんです。先程、時間がございませんでしたので、いちいちお話する事ができませんでしたから、簡単に補足させていただきます。まず上総、下総、これは千葉として一括してよろしいんですが、その千葉の一部、上総では7世紀の廃寺が2寺確認されておりました。これが木更津市の上総大寺と、市原市の二日市場廃寺です。その後、成東町の眞行寺廃寺、あるいは岬町岩熊廃寺、そして、市原市の今富廃寺、そういった廃寺が続いております。下総へまいりますと、有名な竜角寺が今の所古い寺院として顔を出しております。そしてその後、印西町の木下別所廃寺、佐倉市長熊廃寺、そして、八日市場市の八日市場大寺廃寺、結城市結城廃寺などが登場してまいります。常陸では、有名な協和町の新治廃寺がありますし、さらに筑波町筑波廃寺、石岡町の茨城廃寺、そして水戸市の台渡廃寺など



が、8世紀になって登場してくるわけです。こういった関東の造寺活動の中で、きわめて注目されるのが武藏でございます。武藏は東京都が大変わかりにくいので、ここに集計しました廃寺の大部分は、北武藏、埼玉県というふうにお考えになって結構です。その埼玉県の廃寺の分布はこれも前にお話しいたしました、『埼玉県古代寺院調査報告書』の中に掲載された分布長です。それぞれの新旧関係は、後につけました瓦の編年表によって確認していただきたいと思います。その埼玉県で、一番古いのが寺谷廃寺でございました。ここでは破片でしたけれど、飛鳥寺様式の瓦当が出ております。その後、勝呂廃寺・西別府廃寺・女影廃寺・馬騎の内廃寺・城戸野廃寺といった廃寺が続きます。かなりの廃寺が国分寺以前に造られているんですね。下野、栃木県に入りますと、ここでは、百濟系素弁の軒丸瓦が馬頭町の尾の草と小川町の浄法寺廃寺から出土しております。7世紀中頃の廃寺でしょうか。下野ではこの那珂川流域、馬頭町と小川町を中心とした地域に廃寺が集中しております。この辺は東山道から東北に抜ける要衝ですから、後に群衆もおかれますし、早くから有力な豪族が居たんでしょう。そして豪族の氏寺が造られたんだと思います。その氏寺の中からたとえば、浄法寺や大内廃寺などのように、郡寺に格上げされたものもあったんじゃないかと考えられます。

このように北関東では、意外に早く造寺活動が展開しておりました。これは先程申しあげました、推古朝の造寺推進の施策が、東国にもかなり浸透していたことを推測させる事例と考えていいかかもしれません。いずれにしても、東国に想像以上に早く仏教が伝播していたことを考える、指標の一つになるように思えます。もちろん当時の仏教は、先程、岩崎さんが指摘されましたように、在地豪族を中心にしたものであったかもしれません、すくなくとも国分寺以降、とくに鑑真和尚の法燈を継承した道忠やその弟子、広智、そういった人たちが活躍した時期には、仏教は民衆の中にかなり波及していたと考えていいと思うのです。そういった布教活動と、また民衆の信仰が一つに結実したものが、最澄東下の成功だった。大慈寺と緑野寺におけるあの大イベントの成功といった形で昇華したのだろう、私はそんなふうに考えております。

そういうことになると、東国の民衆の間に、仏教がどの程度浸透していくのか、その辺のところは、具体的にはわからないのですが、漠然と仏教の伝播ということで許していただけるんでしたら、それは意外に早く、そして広範に普及していた。そして、東国仏教は予想以上に早くから、華開いていたと申しあげてさしつかえないように思っております。

ついでに一つ、つけ加えさせていただきますが、最澄が鬼石町の緑野寺で構筵を開いた、そして9万人が集まったと申しました。その9万人が実数なのか、あるいは延べなのか問題がありますが、いずれにしても驚くべき数の民衆が集まることはおそらく事実だと思うんです。これは、是非お考えになっていたいみたいのですが、その大勢の民衆の中には上野や武藏の人たちのほかに信濃の人たちもたくさん参集していた。佐久平や松本平からも、あるいははるばる出掛けているんじゃないかと思うんです。それは鬼石町から山を越えれば、すぐに信濃であるという、地理的な近縁関係もございますが、実は道忠が、信濃にも影響をおよぼしていた、と考えられるからなんです。

道忠は、最澄を援助して、最澄のために写経活動を行った。その道忠の要請で信濃国の大山寺という寺の正智禪師が、200巻の法華經を写経して、それを道忠が最澄に送ったということも伝えられております。この時、その写経には、諫訪明神の加護が大いにあったというんですね。この正智禪師は道忠の弟子だったんですね。そんなこともありますから、道忠の布教活動、道忠の影響は信濃にもかなり及んでいたということは、十分考えられますし、道忠を媒介にして最澄の教えが信濃の人たちに受け入れられる条件、下地はすでにつくられていたと考えていいと思うのです。



最澄一行が、東下の途中、信濃の民衆とどんなふうにかかわったか、これはもちろんわからないんですが、想像をたくましくすれば、最澄一行は、信濃の辺りを通っておりますから、あるいは、松本平の何処かに逗留したかもしれません。そして松本平の菖蒲沢の瓦塔によっても推測されるように、すでに仏教を知り、仏教を信仰していた人たちに大きな影響をあたえていたかもしれないんです。

事実、最澄は緑野寺からの帰り、東国旅行の帰路に、信濃坂を越える民衆の便を考えて、広濟院、広拯院という二つの宿泊施設を、信濃に造ることを誓ったということが、『最澄伝』の中に記されております。

私は、前に佐久平を歩いて驚いたのですが、佐久には天台宗のお寺が意外と多いんですね。それが、どの位まで遡るかわかりませんが、中には、平安時代の創建を伝える寺もあるようです。最澄との関係はともかくとして、最澄、道忠、そして広智、あるいはその関係者たちの影響が、これらの寺の創建に多少の影をおとしていた可能性は考えていいように思うんです。いずれにしても、松本平は仏教伝播の経路としてもまた仏教信仰それ自体で、すでに大変重要な場所になっていたと思うのです。その意味では菖蒲沢の瓦塔は、まさに冰山の一角で、その下にはまだ知られざるこの地方の、仏教文化の円熟がかくされているように思います。

そういった、松本平の仏教文化、ひいては松本平を経過して伝播した、東国仏教の実態をこれから明らかにしていくために、私は、丁度長野、群馬、埼玉の三県の若い研究者が行っているような、三県で共同して東国仏教を検討する共同研究が、これからおこなわれる必要があるだろうと考えております。おそらくそういった共同研究で、はじめて私に対する御質問に正しく答えられるような理解が、生まれてくるのではないかと思っております。

桐原 どうもありがとうございました。ではこれから会場の皆様方からの御質問をいただきたいと思います。どうぞ御質問お願い致します。

倉科明正 帰化人と、仏教の東国伝播の問題、関連があるかどうか、それらは実はその先程の明科の廃寺の方も石堂という地名にありました。それである区画で、どうも寺というよりも一つの堂である可能性がある。それからこの塩尻の大門で出ている場合も八日堂という地名があり

ますので、堂に露天で飾られたという先程の説ですが、上屋をかけて信仰されたという面もあるのではないかという点を一つお聞きしたいのですが。

桐原　はいわかりました。では先生方のお話をいただきます。堂のお話を森先生にお願い致します。

森 可能性としては、いろんな場合があるだろうということで、実際に据えたまま、たとえ初層であっても、当時据えたまま出土したということはないんですね。でこの周囲の遺構との関係からみていきますと、鞆堂があつてお堂の中に収めてあったんだろうという場合と、小さな基壇しか回りにない場合には、おそらくその上に直接建っていた形、現在石塔がよく建っておりましすね、あれと同じようにお考えになつたらと思います。そういう場合もあったのではなかろうかという程度です。それから「石堂」という地につきましては、直接そういう地名と結びつくかどうかという事は非常にむずかしいのですが、塔を建てるという中央政府からの要望といいましょうか、そういうものがあったり、造塔を願う者があればこれを許せとかいう場合が『続日本紀』など見ますとよく出てまいります。ですから一番簡単なものはちょっとした建物を建てまして仏様を祀るのが一番簡単なんですが、ただ我々は仏教を信奉しているんだ、という事を示すためには、やはり三重であっても、五重であっても塔を建てるのが一番効果的であるわけです。ですから、おっしゃいますように明科の場合にも塔そのものが建っていたかも知れませんが、ただこれは発掘してみないとわからないことでございます。ですから明科廃寺の場合には少なくとも二基分の瓦塔があった事は確かであるわけですが、それがどういう形で祀ったのかということは発掘しないとわからないのではないだろうかと思います。ただ地名として塔やお堂に関係するものがあれば当然そこにはなんらかの形のお堂があったんだろうと思います。

桐原 ありがとうございました。では次に渡来人と東国寺院との関係、殊に、今度は渡来人からみて、金井塚先生お願ひします。

金井塚 渡来人だけじゃなくて、造寺活動に関係した古代氏族を特定することは、大変難しいんです。難しいから私は、さまざまな仮説を出して手がかりを探しているんです。従って、私が、今まで言ったり、書いたりいたしましたことは、あくまでも仮説なんです。ただし仮説ではありますが、それは事実にせまるための問題提起、ということで理解していただきたいと思います。

私は、東国に仏教を受容した階層には、さまざまな人たちがいたと思うんです。たとえば先程申し上げました、天台宗第2代の座主円澄ですが、円澄は武藏国、埼玉郡壬生に生まれているんですね。明らかに埼玉には壬生という地名があった。これは、推古朝に設置された壬生部と関係しますが、6世紀末には、推古朝あるいは聖德太子と密接にかかわった地域だったと考えていいと思うんです。「聖德太子伝暦」という書物には、聖德太子の舎人で後に武藏国造になった物部連兄麻呂という人が登場しておりますが、この人も武藏国埼玉郡壬生の人なんですね。兄麻呂は舎人として聖德太子に仕えながら、太子の感化で仏教に帰依して優婆塞うばそくといって、俗人ですが熱心な仏教徒になっているんですね。

このように、北武藏の埼玉地方には、6世紀の後半に、壬生部の設置やまた聖徳太子を媒体にして、かなり仏教が伝播していたようなんです。もちろんその中心になったのは、物部連兄麻呂のような開明的な在地豪族、推古朝や聖徳太子とかかわりの深かった支配者層だったよう思うんですが……。

渡来系氏族壬生吉志氏にも注目しております。この氏族については、私は、今まで多く書いておりますが、『続日本紀』や『類衆三代格』に、壬生吉志福正という人物が出てくるんです。この人は9世紀前半、承和年間に、武藏国分寺の七重塔を独立で再建したりしております。この吉志氏というのは、渡来系氏族ですから、そして中央でも蘇我氏や聖徳太子と関係して活躍しておりますから、明らかに福正の何代か前、おそらく北武藏の壬生部の設置と関係して北武藏、東松山市の周辺に移住して来たんでしょうね。そうして、そこから次第に荒川中流域右岸段丘上に勢力を拡大していったと思うんです。7世紀の前半と考えられる寺谷廃寺は、この壬生吉志氏と関係した可能性は充分考えられるように思うんですね。

こんなふうに私は、これはあくまでケースバイケースで、決して普遍化させるつもりはないんですが、仏教伝播と関係した氏族は、それぞれ、地域の実態にそくして考える必要がある。それが渡来系氏族だった場合もあるし、開明的な在地豪族だったこともあるだろう。いずれにしても、地域の歴史展開の中から、粘り強くじっくり探索していくかなければならないように思います。その点で森さんがいわれた、明科廃寺のさまざまな瓦は、信濃の仏教伝播を考えるうえで、大変重要なことを語っているように思うんです。これは是非、松本平の問題として検討していただきたいと思います。抽象な答えで申しわけありません。

桐 原 ありがとうございました。まだご質問はたくさんあるだろうと思いますけれど、時間が来てしまいましたので今日はここで終りたいと思います。ただ今三人の先生方からいろいろなお話をいただいたわけで、我々目が開けたわけでございます。この目でもう一回松本平の遺跡を見わたせば、見直せば、おそらく何か出て来るだろうと思うわけです。瓦塔は氷山の一角だと言われましたが、従って水の下に沈んでいる部分を私達はみつけていかなければならない。こういうふうに思います。以上をもちましてこの第2部のシンポジウムを終らせていただきます。どうも先生方ありがとうございました。

